

空 手 道 連 盟

沿 革

幕別町空手道連盟は、昭和49年7月に農村青年を中心とした1スポーツサークルとして、又十勝では二番目の空手道組織として発足し、当初は幕別町青年団体連絡協議会の空手道サークルと言う名称で活動をしていました。会の中心となったのは、当時、日本空手道会系東流初段であった渡辺善隆で会の参加者のすべてが初心者ばかりと言う事で指導に当っては大変な苦勞をしました。

当初、練習の場は、町内相川小学校の体育館を毎週火曜日と土曜日の夜8時から9時半頃迄借用し参加者が農業青年オンリーで農繁期は普通大変な負担なのですが、みんな熱心に参加出席し時間が過ぎる頃迄稽古に動んでいました。尚、最初よりの参加会員は、相川の松田敏春、宇坂照明、宮脇敏正、奥田茂己、西猿別の三好勝幸、大豊の南川一己、千住の網島康夫の七勇士達と指導者で相川の渡辺善隆の八名でした。

空手道は、一般に歴史が浅く柔道や剣道の様に統一された形成を当時はあまりになっておらず、四大流派を中心に各会派から成り立ち非常に細分化し、指導や普及がバラバラに行なわれていました。その為に多くの誤解や認識の不備が、一般からの空手道への理解を遅らせた原因となっていました。しかしながら、大学では学生選手権試合、一般では全日本選手権大会等、流派派に關係せず、全般的な大会を押し進めそれらをステップに統一の方向に向かいつつありました。尚、我々幕別町空手道連盟は、指導者の渡辺善隆が所属している「日本空手道会系東流」（摩文仁賢三会長）の傘下に入る事に決定し、約1年後に同会より承認を得て、同会の公認指導員として渡辺善隆が任命されるに至りました。発足年の10月に町教育委員会勤務の本保喜秀氏（和道流参段）が新たに加入し、指導面等で多くの助言を与えて頂く様になりました。

昭和50年に入り1月に北海道立深川青年の家で合宿を行ない会員相互の充実を計り有意義な研修成果でした。同年4月に入り練習場を青少年会館に移行しこの時に、従来の空手道サークルから幕別町空手道連盟へと名称も変え、十勝管内では、大学、高校を除き、帯広市空手道連盟に次いで、実質二番目の空手道組織の誕生となりました。5月に入り新たに明野の谷地田博昭、青砥喜久男、新川の小谷春男、相川の渡辺隆義・矢竹尚の各君が加入し増々の活気を見せ、練習も基本の突き、蹴り、受け、組手、型と多くを取り入れて行ける様になりました。又、会で初めての級審査会を行い、初心者を除き多くの者が、七級と八級に合格するに至りました。8月に入り日本空手協会（松涛館流）初段で千代田生命勤務の富田哲夫氏が加入し、一流派を越えた連盟へと成長しつつありました。この年に十勝空手道連盟に加盟し、12月には第10回幕別町青年団体連絡協議会の青年の集いにて演武会を行ない、青年の空手道の理解を求めました。

昭和51年に入り前年に続いて道立深川青年の家で合宿を行ない、東北本部道場で研修を行ってきた渡辺指導員の型を中心とした練習の強化が、合宿の成果であった様です。又、研修終了日には、

青年の家の先生方の要請で研修生全員の前で型の演武披露を行なうハプニングまで起きました。



「北海道立深川青年の家」での合宿風景



「青年の集い」での演武会風景



第2回合宿参加者

同年5月に入り、幕別町体育連盟に加盟が承認され渡辺指導員が理事となる。7月に入り北海道内では有数の農業雑誌である「ニューカントリー」に紹介された。



昭和52年に入り、2月に幕別町で十勝連合青年団の「文化の集い」が行なわれ、その折、演武会を行い十勝中にその存在を紹介される機を得た。同年に、北海道空手道連盟、全日本空手道連盟に加盟した。昭和53年の2月、指導者の養成と技術の向上を目指し我々の上部組織である日本空手道会系東流東北

本部より、吉成主計師範(日本空手道会系東流七段(財)全日



本空手道連盟公認七段)を招き指導を賜わった。特に型を中心に数多くの型とそれらの分解応用、等連日にわたり学んでその後の指導に役立てて行った。



ニューカントリーに掲載されたページ



右手前が吉成師範

〈歴代役員〉

発足当時は役員等は置かず、渡辺善隆が代表者兼指導員であった。その後昭和51年度より役員を作り本保喜秀氏が会長となり、役員は現在も在任中である。



渡辺善隆代表

〈資 料〉

空手道は、日本の武道の中で紹介されたのが大正11年ですが、古くは中国大陸からの影響と考えられ、明確な起源については明らかではないが空手の前身として考えられている拳法が寺院の防衛、行脚僧の護身術として仏教と密接な関係があった事から推察すると、六世紀頃に達磨大師が逗留した河南省の少林寺を中心とした拳法がその起源として最も有力視され、それが体系づけられて後世に伝えられ、今日の空手の基礎となったと思われます。拳法が沖縄で独特な発達をとげ今日の空手道に至ったことは二つの大きな歴史的要因があります。一つは永享元年〔1429年（足利時代）〕中山城主尚巴志王の全島統一に当り文治政策を敢行して武器の携行を禁じ、さらに慶長14年〔1609年（江戸時代）〕薩摩藩主島津義久の琉球征服に際し一切の武器を取り上げ、それらが機縁となって従手空拳の護身術が発達したことである。もう一つは、琉球王朝が数百年にわたり中国との間に従属国として朝貢関係を続けていた為、宮民の往来が頻繁となりその拳法を学ぶ機会に恵まれていた事である。この様な環境の元に沖縄では多くの拳手、達人が輩出し種々の流派が生まれた。

本土への紹介は、大正5～6年に京都演武殿で初公開演武が行なわれ、同11年文部省主催の第一回運動展示会で船越義珍氏が空手の沿革、型を説明した。その後、昭和初期にかけて数名の空手家達が本土で空手の普及に当り現在に至る。主に指導者達により流派を名のった為空手の普及が遅れた原因と言われる。

現在も、松涛館流、糸東流、和道流、剛柔流の四主流派を柱に多くの各会派が残っているが、全日本空手道連盟に属し段級審査から試合、審判、指導されつつある。

現 況

本年度、かねてより空手道の普及活動と相互の技術交流を行う目的で十勝大会に対する熱があった中、昨年度の長野国民体育大会で空手道がデモンストレーション種目として参加し、又、昭和56年度よりの国体に正式種目に決定され、その様な状況の中で今のうちからという事で、6月3日帯広畜産大学武道場で第1回十勝地区空手道大会が開催され、参加団体は、帯広市・幕別町・



谷地 田博昭君の新生

豊頃町・帯広畜産大学の4チームで、組手の部では渡辺善隆、谷地田博昭、青砥喜久男、渡辺隆義の4名が出場し大学生を相手に善戦した。又、この大会の副委員長に本保喜秀氏、審判に南川一己氏が加わった。型の部では、北海道内では幕別しか出来ない演武を行ない、特に青砥喜久男君が行なった「田和の鈕術」や糸東流の型「新生」は注目以上の価のものであった。又、全日本から昭和54年度より四大流派各1つの型が指定され、渡辺指導員がその型「バッサイ大」の演武を行なった。参加者の中に会員の小学3年生 深川政和君と4年生の大内田功君が「平安初段・平安二段」の型を行ない温い拍手を送られた。



健闘する渡辺隆義君右側



青砥喜久男君の鈕術



左側大内田功君、右 深川政和君

現在、一時幕別小学校の体育館を借用していましたが、時間的な事情で元の青少年会館で練習を行なっています。

〈役 員〉

顧問	大石 忠夫	日本空手道会糸東流名誉二段		
	福田 省市	日本空手道会糸東流名誉二段		
会長	本保 喜秀	全日本公認三段		
副会長	南川 一己	全日本公認二段		
事務局長	渡辺 善隆	全日本公認三段		
事務局次長	渡辺 隆義	二級		
理事	綱島 康夫	初段	監事	学坂 照明 全日本公認初段
	谷地田博昭	全日本公認初段		宮脇 敏正 初段
	青砥喜久男	全日本公認初段		



本保喜秀会長

展 望

空手道も近い将来には、必ず柔道や剣道の様に一般化すると思いますが、その為に現在、全日本空手道連盟が中心となり空手道の統一と目前となった国民体育大会参加やオリンピック公式種目への参加運動を行なっています。

とかく空手は喧嘩殺法などと言われたり、瓦を何枚割れるか等と誤解にもはなはだ迷惑千万と思う事もありますが、武道の中の空手としては心を養い、又、心身を健全にするのが元来の目的であり、老若男女を問わず、どなたにでも出来るスポーツとして、健全な心身と豊なる人間形成を目指し今後

益々、多くの方々から愛好されていくと確信します。その為にも我々幕別町空手道連盟は、今後、指導員の養成と誤解のない空手道の普及に務めてまいりたいと考えます。

幸いにも、今迄多くの会派から成り立っていた日本の空手道界も、全日本空手道連盟が中心母体となり統一の運びとなり指導内容の拡充や審判、段級位等も統一を見るに至り、学ぶ者、指導する者相互が充実出来る方向になって来ましたので、一段と進歩出来るのではないかと思います。

その様な訳で、十勝で二番目に発足した当空手道連盟は、従来以上に空手道の普及を押し進めて行かなければなりません。柔道や剣道の様に優秀な選手を世に送り出して行くのも我々の今後にかせられた使命であります。

